WASON
HQ
1104
J74+

July 1893
no. 349.

明治廿六年七月二十二日發兌

女學雜誌

第三百四十九號

女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

本號目録

社説

女學生の歸郷○女子夏季學校

理學

雨雪（馨子）

雜録

老牧師（新躰長歌）かすみ

兒籃

アンセルモ物語（しづ子）

家政

献立法心得（溪流女史）

論説

明治女學校高等科生卒業論文

其一 女子高等教育（富田八重子）

其二 教育の最要時機（増田たき子）

○ねむけざまし

○若みどり

○田家のこよみ

通信

高知縣通信○三重縣通信○福井縣通信

女報

前號目録

隨感

年齒三十の人の述懐○春こそさびしけれ○戀は男女の間に限る可らず○勇者の涙

史傳

女傑、女傑を評傳す（ウイラードがソマーセツトに對する評）

摘要

女子と政治○チベツトの婚姻○日本の家族制

理學

七夕（けい子）

兒籃

黄金機會（しづ子）

小説

春風裡（不知庵主人譯）

雜録

母の別れ（ひさご女史）○儉約の覺悟。大博覽會特別通信

家政

子供につきて（しづ子）○手製ヲムチ

田家のこよみ

女報

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

明治二十六年七月廿二日發

第三百四十九號

社說

○女學生の歸鄉

學窓を閉ぢて暫らく郷里の家に歸り、父母の膝下に暑休を過さんとするの女學生は、今こそ勉學の結果を大いに顯はす可き時なれ。田舍人の女學を重んずると輕んずると一つに此に關はる。次回の女學生の多く出ると少なきと、亦之に關はると多し。諸君の責洪大なりと謂ひつべし。

○女子夏季學校

一般夏季學校の効驗を味わひし人々は、本年特に女性の爲に催ふさるゝ女子夏季學校の効益著るしきは推測るを得ん。名ある婦人諸君の講師とならるゝと多し、女子教育者の會合會談の便りあり。此等は、今回の催ふしあるによりて、初めて得らるべきものとす。

理學

雨雪（上）

馨子

年少の女文學者、同じ年頃の理學生、但し是も女に向ひ「此頃の炎暑、誠に金を融すとも申すべし、黃昏頃の涼風、窓の青簾に音信るゝは嬉しけれど、日の中の玉なす汗は、實に五月繩くも物憂くなん、思ひ侍るかし、斯る暑さの折も折、雲限なく沸出でゝ、大粒の然も涼しき騷がしき雨、只雷鳴だけは大禁物ゆゑ、是丈は御免を蒙むるとして、私儘ながら其涼しき雨に庇を打たるゝ方便もあらば敎へたまへかし、理學者の實益とやらは、滊車よりも電信よりも此處にこそ」といへば理學生は微笑みながら「其はお安きお望みなり、何時にても革包を下げて來たまふべし、我は未だ未熟なれど、我先師の發明したまひし通力自在の方便あり、それにて御身の願ひを安々と叶へ申すべし」　文「其は嬉しき命せながら、浮とは

信じがたし、革包を下てとは如何なる譯にや、敎へたまへ」と屢々請はれて、理學生は眞面目になり、「我先師の發明とは滊車の事に侍り、是に乘りて日光に赴きたまはゞ、其凉しき騷がしき驟雨は、日々御身が假住の窓に音信るべし、近來亞米利加などにては、人造雨と申す事をいへど、其は一度女學雜誌にて言ひし事あれば此處には、再び申すまじ」 文「是は知ざりし、擔がれし、然は言へ、日光の驟雨、彼山々の翠に濺ぎて、大谷の流れすさまじく音を添へて、然なきだに凉しき風の、所がらとて軒の釣葱草に戰ぐなど、我も亦戀しくなつかしくぞ思侍る、然るにても、日光に許り斯る例しありて、東京に其事なきは如何なる仔細にや、聞かまほし」 理「其は我理學の範圍ゆゑ我其譯を申すべし、 其代り御身も亦文學上の事を話したまふべし、暑さを忘るゝには、是ぞよき方便にや侍らん、凡そ雨といふも今更のやうなれども、 水蒸氣の凝結に依つて生ずるものゆゑ、海に近き國は雨多く、大陸の海に遠きところは雨少なし、又其水蒸氣の凝結は、溫度に依つて變化あり、 溫度高き時は、空氣中に多量の水氣を含み得れども、溫度低き時は空氣濃厚となりて、其含量を減ず、 即ち其減ぜられたるだけは、水滴となりて滴り落つ、此點を結露點とは申すなり、此露滴は多數相合して次第に降下し、遂に普通の雨滴となるなり、又雨は風にも因る、大陸の海に遠き所にても、大洋よりの風吹到れば雨を降らし易し、 又雨は山にも依る、高山は水氣を遮るなり、中亞細亞喜馬拉山の北に無雨の地あり、是印度洋より來る水氣の喜馬拉山に遮ぎらるゝに依る、伯露にも無雨の地あり、是貿易風の安的斯山麓及び南亞米利加の平地を過ぎて、 水氣の其東岸なる山脈に奪ひ去らるゝが爲めなり、御身は雨を好みたまへば、 日光への滊車に引換へ、斯る無雨の地に滊車の便なきぞ仕合なれ」 文「生れてより雨といふもの見しとなくば、斯く雨のなつかしうも思ひ侍らじ、第一雨なくば文情を減ずると甚だ多し、 物すごき所、悲しき所、憂はしき所の景物は、 雨ならでは外に侍らず、 紫女は流石に我國の女文學者に侍り、 源氏の須磨にさすらひたまふ折は、 物悲しき事、 なつかしき事、憂はしき事の數々に纏はれたまひて、心細さの限りなるに、 雨痛じう降増り、 高潮の打揚ぐる景色を添へて、 文情を彌が上にもかなしくなつかしく物凄くゆかしくされぬ、 何某の鄕の樂しきも源氏、友も源氏、 面白きも

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

のも原氏と命せわりしも道理に侍り、其外春雨のしつぽりと落付きたる、夏雨の慌だしく快き、秋雨の哀れに悲しき、一度詩人の腸に染みて、錦繡とならぬはあらじ扨ても忘れたり、日光の驟雨の譯は如何」と言へば「我も言はんとして其處までは言到らざりし、前にも申せし通り、山は水氣を遮ぎるものに侍るが、其遮ぎる譯は、第一風を支ふると、山頂の寒冷にして空氣を冷すとに依ると申すを、去れば山は常に多量の水氣を含み居るに、搗て加へて夏時我國は、太平洋より來る暖かなる東南風を受くるを以て、其風の中に含む多量の水氣、日光の山に觸れて凝結し、日々の驟雨と變ずるにや侍らん」文學者は透さず其尾に附きて、「實に其雨こそ日光の爲めには、内外旅客の夢を洗ふ、いとも尊きものに侍り、木々の梢先づ騷ぐに、偖はと心付くゆかしさや如何、蕉翁がアヲ尊と青葉若葉の日の光といはれしは、日光といふを受けてのとなるべきも、尊きは日の光計りには侍らざかし」理「のたまふ通り雨の德はなか〱に盡しがたし、造化の大なる賜物にこそ、次に空氣の温度を變化せしむる原因は、第一温度の異なる空氣混合する時、第二前にいふ空氣の高山峻嶺等に觸るゝ時等重なるものに侍り、彼の一地方にて風位の變る時に天氣の變る、曾て述べし梅雨なども、第一原因の外には出侍らず、序に今一ツ申したきは、雨量の高所に少く低處に多き事にてあり、露滴の降下する中に、他の露滴と合して、次第に大粒となり、遂に普通の雨滴となるは、前にも申す如くなれば、雨滴の地面に近付くまゝに、其量を増す事は、申さずと尤の事に侍らん、去れば高きところは、自ら雨量少なく、低きところは多き事、通常の象氣臺にて、臺上と地面とは凡そ二寸ほどの相違ありとぞ、實に見る人の心々、御身は雨の餘情を探し、我は雨の實をたゞす、御身は無形、我は有形、其知るところの異なるは、學ぶところの違へる爲めにや」といへば、「御身は智、我は情、是ぞ車の兩輪に侍るべしとて、微笑みぬ。

小說「春風裸」續篇は、不知庵主人の微恙あるによりて一回掲載を延す。社說起草者故ありて今回十分の意を盡くする能わず之を次回に讓るにいたるは殘り惜しき思ひあり。

(三)

雜録

老牧師

かすみ

(一)

いかなる夢をや結ぶらん　こよひ一と夜をかぎりにて
あすははなよめ今日は姫　二しきのふすまかひやりて
思ひにくしてうちふせば
松風さびし庭の虫　月かげすゝし木の下かげ
ゆめぢにたまは何處さまよふ　さまよふ魂は何處ゆく
松風さびし木の下かげ　月かげすゝし庭の虫

(二)

殿はほゝえみかえり見て　姫があしたの縁むすび
ながき御身がとしつきの　うれひは解けてほどけたり
かれら妹脊がかたらひは　いく千世かけて榮うらん
よろこばしきは明日の日と　思ひはながし夜も長し
長き一夜をかたりつゝ
殿は奥方もろともに　いはひ玉ふぞ目出たけれ

(三)

夜はほの〲とあけがらす　竹村すゝめ二つ三つ
羽ばたきて鳴く鷄の音と　をちこちひゞきさわぐ也
一夜をこめて草の露　涙をそへて露をもし
うちしめりたる大丈夫は
庭の木影に身をよせて　あけゆくそらをうらみつゝ
夜を慕ひてかくれゆく　木影の庭に身を入れて

(四)

實に哀樂は一と事の　彼と此とのながめなれ
憂き身にすだく虫の音は　秋の夜長のかたり草
思ひにもゆる螢火は　水ぎわの船のすゝしかぜ
たつくる人のくるしみは　歌よむ人の風流なれ
敵の亡びは榮なり　いくさやぶれていさほあり
實に哀樂は一つなれ

(五)

雲井のとびらあけわたり　かすみのころもぬぎ去れば
木々はあしたのけそうして　露のうるほひ新たなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

わらひざゞめく男女　今日のいはひをいはふとや
つるべの音もこゝちよく　もゆるかまどの火は高し
けぶりはそらにむすぼれて　今日のゑにしを祝はふらん
ものみな今日を祝ふらん

（六）

奥方やをら起出たまひ　なかばは笑みて槇の戸を
半ば開きてうちゑみて　姫はいかにと見玉へば
よろこばしさによべ一夜　いねずありける樣ならで
泪重く色青く　姿かはりて哀れなり
息の音細く聲細く　姿かはりて哀れなり
あはれの姿たえ〳〵に

（七）

日影のぼりてあさがほの　花やうやくにしぼみけり
その照る日はかはきつゝ　この家のみはうちしめる
あかき眞晝をくらくして　吹入る風の戸をたてぬ
祝ひに來る聲ひそめ　うち案じつゝゆく人の
あしをと低くをとさびし　夏の央ばに秋は來て
木の葉一つ落んとすらん

（八）

入あひのかね雲にひゞき　ねぐらに鳥の聲ほそし
西の山の端かげくらく　木梢田の面色あほし
のこる螢の一つ二つ　糸より細き雨にぬれ
野づらの奇しき火にそひて　近づくものを照らす見れば
夜はうれひのしるしとて
黑のもすそをもやかに　しづけくたれて泣き居たり

（九）

實に墓なきは人の身ぞ　姿は肉のころもにて
色はころもの摸樣なれ　年若かくして色まさり
年おとろへて色おとる　衣の色に人あらば
さめたるのちのあや錦　舊き名殘を如何にせん
實にはかなきは人の身ぞ　はかなき肉の姿こそ
つれなき人のたのみなれ

（十）

姫の姿は衰ろへて　色のかんばせ花ちりぬ
にほひは失せて骨たかく　みどりのかもじまばらなり
盥の水に驚ろきて　かゞみの影に身をかくし

見られんとのくるしとて　きぬのみかつぎふし玉ふ
殿のなげき盡きがたし　母のうれひ消しがたし
あはれ憂き世は去りがたし

（十一）

或日姫君しとやかに　しとねの上に居直りて
親のつかねしわがつまに　あひ見んとを乞ひ玉ふ
衰ろへし姿をわざと　見せんとや實に見せんとや
はぢらひ玉ふ景色なく　しばしあひ見て乞ひ玉ふ
わが身はついに失せぬべし
御心ながく解き玉へ　今日を限りに忘れ玉へ

（十二）

忘るとは情けの淺き　思ひかな淺きなさけぞ
かの人は實にこの日より　忘れ玉ひて解けにけり
ひとの結びしをにしこそ　實に此日より解けにけれ
たゞ解けやらぬむねにこそ　神の結びし緣にしあれ
こゝろにひめて思ふらん
乙女の胸は大丈夫の　姿をしかと刻みけり

（十三）

雄々しき君のますらをは　兄とも師ともあがめたる
幼きよりのいのちなり　かたらふ事は久かたの
あめの御法のいと高き　いと淸らけき敎へのみ
なさけのつゆのつゆ斗り　うちしめりたる言葉なし
其御敎へに身をさゝげ
その御情けになさけこめ　年月日比つかへける

（十四）

戀をいつよりせしと問ふ　人の言葉のあやしけれ
ひらきし花は其もとの　蕾のたもといつよりか
ほころびそめてはぢらひて　わづかにかほりにほはせて
蝶のたはれにいざなはれ　あかきこゝろを示したる
その日をいつと知らんやは
なさけと戀とうやまひと　たゞ一すぢの道なりき

（十五）

實に妹と背のかたらひは　あひ合ふとに限らんや
夫をもてるやもめあり　つまをもてるやまをあり
身に百年のちぎりをこめ　心一と夜のなさけなく
くろかみ長き尼法師　朝たの市に世をばすつ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

さらば乙女が人知らぬ
むねの奥底千歳かけ　ちぎるよすがのあらずやは

（十六）

姫は縁しを解きすてゝ　のこる黒髪きりたちて
心にしかと結びけり　今はや近く世を去らん
死するぞわれのいのちなれ　長き旅路のかどいでに
今一言の御おしへを　ふみにてたべとこひ玉ふ
かわりし姿かのきみに　見せまつらんは恥かしと
あわぬこゝろぞあわれなれ

（十七）

まきかへし又くりかへし　くりかへし又まきかへし
よむふみの黒き文字は　いと高きいともけだかき
御敎へのいと潔よき　白かみにうつるが下に
なさけある赤き心の　なからずやとまたまきかへし
くりかへしまたまきかへし　ながむれど最とも氣高き
御敎への外なかりけり

（十八）

静かなる或る夕ぐれに　祈りしてこしもとちかく
招きつゝ好める節の　たゝえうた樂にあわせて
うたはせつかのふみ取出で　をしいたゞきてひしと抱き
聲ほそ〳〵とうたふなり　「主によりてぞいつくしめる
友のまじらひほとはにたへじ　世の別れもまた天にてあふ
愛のむつびこそたのしくあれ」

（十九）

實に愛着は限りなき　とこしへのいのちあればこそ
くるしきうちにたのみあれ　なゝそぢたらぬ今生の
短かきうき世宿として　肉に溺るぞはかなけれ
「罪もうれひもなき御國の　あいのたのしみ限りなし」
かぎりなき世のつきせなき
思ひにあふるなさけこそ　とこしへのよのむつみなれ

（二十）

今夜一と夜をなごりとて　まくらべまもる人多し
人々聲をしづませて　さびしさまさる眞夜中に
吹出る笛の一ふし　よな〳〵のねいろ今夜は
あわれまさりてものすごし　姫は氣付きみはり玉ふ
かのきみ來まし臨終の　祈の聲はほそ〳〵と

息のねと共にたえにける

（廿一）

荼毘一片の野のけぶり　鳥部のつゆぞなみだなれ
むかし結びしわかとのは　あらたに得たる妻つれて
野邊の送りの車の音　馬いなゝきて聲たかし
かのきみひとりかげうすく
無きかのごとく隨がひて　黒の喪服の色こゆく
十字のしるしきらゝなり　無きかの如く隨がひて

（廿二）

都のはての村のはしに
牧師はひとりわびずまひ
かみしろくひげまたしろし　妻もなく子も亦あらず
たゞひとり世をほゝえみて　人々をひろく愛して
へだてなしをさなごも　翁、乙女子、わかうども
かれのこゝろにひとつなり
在りながら彼の心に
今一つ
人の知り得ぬ盟ひあり　人の汲得ぬなさけあり。

兄鑒

アンセルモ物語（上）

しづ子

イタリヤ國の古い言傳へに、昔し某貴族家に極く仲の好い兄弟が有つたさうです。兄といふのが甚だ不思議な場合に弟の死ぬ可き處を救ひ、其上父の怒りに勘當を受けた時も矢張り弟は兄の盡力で赦され、晴やかな身になつたとて、弟は殊さら兄を慕ひ、父の世を去つた後は兄弟同居して、弟は兄に從がひ、万事子の親に於るが如くに仕へて居り升た。

然るに或日思ひがけなく兄弟互に別れ／＼になり升た。事の元末を尋ね升と、兄は處用あつて、何氣なく外出した切り待てど暮らせど家へとては歸らなかつたさうで、弟は驚ろきもし、悲しみもして、早速其有家を探ね始め升た。國中は勿論殘る隈なく、山の中も水の底も漏なく手を廻して覓め升たが聊か手がゝりは在ませんかつた。兄は影も止めず、消えてし

まつて、誰も行衛を知る者がなかつたのでした。

この通りにして半年餘も音沙汰なく過ぎてしまふ中、ある夕弟が餘處から歸つて我家の戸口をは入らうとして居升と、日本ならば、人眼を憚る虚無僧姿とでもいふ装の人が偶然側へ寄つて來て、一通の文を手に渡し、耳に口よせて、囁いたは正しく兄の名でした。當時伊國戰亂の時代とて、人眼を蔽ふ服装はまゝ有たとで格別見る人の不審せぬまでになつて居り升た。名をアンセルモといつた弟は其虚無僧を引捕へて、身搆する中件の人は素早く群集に紛れて何處ともなくあとを匿くしてしまひ升た。アンセルモは餘儀なく請取つた手紙を開き升と、左の如き文面でした。

取急ぎ一筆認め申候、愛弟よ兄は死せしに非ず、病るにも候はず此兄を思ひ玉ふおとゝの心も變らずは、左に御依賴に及候一條万事をさし置き御叶へ被下度懇願仕候

御願の筋とは今夜を始めとして今後毎夜〇〇家邸内南向の外塀まで御出向き願度儀に候最終より第二の窓より十歩を隔てゝ件の高塀に少さき穴有之候が、三方密閉の角燈をお提へ被下、人眼にかゝらぬ樣此穴へ右御さし入れ、明き方を穴の方へ向けられ度候、時刻は眞夜中を計りて來り玉へ、而して寺の鐘一時を報じ候はゞ早々御歸邸相成度候。右御依賴御果し下さらば、彼處に再會の期あるべく、兎に角。賴みの一條盟つて忘れ玉ふ可らず。

兄より

最愛の弟に

其夜弟は供も從へず、兄の指示した處へ行き升た。先づ注文通りの角燈を提へ〇〇家の邸近く參り升と、こゝはさしも繁華な都の町外れで、人の行往も極く稀な處でした。微かな星明りに窓を數へ、石塀の切目を探ね升と、正しく見當つた穴は嚴丈な鋼の格子を嵌め、半澄明な角な板が張つて有り升た。弟は取り敢へず件の穴に角燈をさし入れ、さて傍らに佇みつゝと見かふ見、何故兄が此樣な場處へ自分を呼よせたかと考へ始め升た。程遠からぬ向ふに流れ河が有升たが、弟の考へには、兄が何か人眼を憚かるとが有つて、市中の繁雜を避け此の河を下つて來るとで有らうと推測いたし升た。其夜獨り佇んで待ち詫びる間に一度ならず二度ならず跳び立つ思ひを致し升た、併し櫓の響と思つたも、足音と感じたも皆空賴

めで、兄は其夜も、其次の夜も、其又次も、いつも來る様子なく、半月の間も同じ刻限に同じ場處に待ち合せ升たが、弟もほと〳〵待ちあぐむ様になり升た。

併し他に手の盡し様もなく、何はさて置き兄の來までかくして待てといふ指圖でしたから、面會する近道は一切外にはなく、據ない處から、十一ヶ月と二十日といふもの、倦まず撓まず、此高塀へ通ひつゝけ升た。

かくして追々時の過つにしたがひ、弟は兄が己れには知らせず、何か政事上の權謀に拘つらひ、かくは身を匿すとになつたものと推察し、就ては例の場處に待合すとも非常な用心をせねばならぬと心づき、時々己れの居場處を變へ、またいつもの處へ行くにも人に怪しまれぬ様度々道筋を變へなどして氣を配り升た。

が丸でお先眞暗な仕事で、兄を信ずるとが深く無つたら迚も續けるとの出來るとでは有ませんかつた。取わけ不思議と思はれた事は其角燈をいつも持參せよといふとで、弟は心の中に「當方の爲かといへば、兄の足音を知らない此身でもないまた彼方の爲かといへば、此人里離れた淋しい傍道に、佇んで居る人が二人有らうとは思へぬ筈と不審は晴ませんかつた。併し殘忍政府の下に亂暴な政黨のあつた當時には逃亡すると、姿を匿すとなどは珍らしく有ませんかつたから、アンセルモは兄の言葉通りを守つて居り升た。時としては其頼母しい忍耐深い心の中にも望は微かに消え殘る螢火の様になるとが有升たが、さりとて、決して倦むとはありませんかつた。

遠寺の鐘は一時を報じ升た。アンセルモの口の中に「十一ヶ月と二十一日！最早丸一年に間もない、よし〳〵、いつまでも待たう、兄上の爲には一年はおろか、二年も三年もといひ塀の穴に手を入れて角燈を取り出し升た。蠟燭は盡きかゝつてトボ〳〵して居り升た。「アヽ燈までが待詫て居ると見へるといひ升た。歸らうとして踵を一度廻らすと同時に足元の平石をやたら持擧るものが有つて、地を割つて立現われたものは——他のものでない、正しく兄でした。

其上着を、早く此身にまといて此牢着を匿さねばならぬ。

と耳に囁やく兄の聲を認めて、アンセルモは呆れ果て、

なに、牢着と仰り升か！

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

兄は手早く上着を身に纏升た。アンセルモは薄明りに兄の容貌のやつれたとも、素足に何も穿たぬとをも見分け升た。兄は角燈をとつて上へ投げ出し河の方を指し。

それは其まゝにモウ用はない、

弟は不審晴れず、言ひいでん言葉さへ知らず、

丁度入用の時に消えて役には立ませんで、

イヤ、十一ヶ月と二十一日間確かと役を務め遂せた、アンセルモよ、御身を措いて此兄の役に立ちしものは此角燈に越るもの恐らく世には有るまい。

聞くも不思議な此話しを反響に請とつた石塀厚く、寐耳を驚ろかすまでもなく、抜足に過ぎ行くに人の姿は家居の影に暗まされて、こゝらに再び現われませんかつた。

翌日朝のしのゝめに一艘の帆舞船は此港から纜を解升た。其甲板に佇む人の中に兄と弟が古郷に名殘を惜しんで居り升た。兩人の中弟は若やかに、兄は容貌かしげて、双の手は勞力に従事したものゝ如くいとゞ瘤立つて居り升た。併し牢着はいづれへかなくなつて兩人とも、通例貴族の装ふ服をつけて居り升た。此時アンセルモは

さて見よ、これにて危險もいよ〳〵なくなり升た、これからゆるりと兄上のお話しを承り度く存じ升。第一不審に存じ升は兄上の御文通有りし時よりあれ迄も此身を待たせ玉ひしこと〻、終りに出來玉ひし處で御座り升。

其事なれば、今其話しの出來る樣になつたが第一御身の賜だ、毎夜持參して呉れたあの角燈、あれこそ此兄の命の綱で有つた。

それでイタリヤの海岸、次第〳〵に海原遠く微かになり、乘組人の心はいづれも船の向かひ行く新世界をおもひ始める頃、アルセルモは兄と共に甲板を下り、懷舊の涙にむせびつゝ左の驚ろく可き話しを聞とり升た。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

献立法心得

溪流女史

食品を調ふる事は、婦人の主なる務なりとのよしは、今更こと新しく論ずるにも及ばじ。されど世には調理法に心する婦人すら、献立法を度外視し、爲に切角の調理も、さして滋養とならぬのみか、時には嗜好にだに適はずして、空しく徒勞になり行く事多ければ、予はこゝに献立法の心得を示して、家事に心ある婦人の一考を煩はさんとす。

そも献立法と調理法とは、共に大切なる事なれども、殊に大切なるは献立法ならん。何となれば、献立は主に考に屬する事にて、たとへば戰爭に於ける陣立の如し、調理法はこれと異り、主に技術に屬せる事にて、戰爭に比喩ふれば、砲を發ち鎗を振ふが如きに過ぎず、されば信玄、孔明、ナポレオン等が勝利の、主に陣立に依りて、鬪爭にのみ因らざりしを知らば、婦人が食品を調ふるにも、まづ献立を能く考へて後、調理にかかるべき事至當ならん。かくてぞ廚房の信玄ともなり家内の孔明ともなり得べし。

献立法の心得とは（一）滋養物を撰むべし（二）消化の度を考ふべし（三）嗜好に適せしむべし（四）變化を要すべし（五）經濟上に注意すべし、等の五ケ條なり。

（一）滋養物を撰むべし

諺にいはく「命は食にあり」と、眞に然かならん、草木すら瘠土に栽ゑて肥料せず、雨露のうるほひもなくば、いかにしてか生育せん、まして動物の肉躰、ことに人の身躰に於てをや其健否强弱は、みな草木の肥料に等しき食物の良否に因るべきはいふまでもなし。然るに世の人々の中には價貴きもの、或は味良きもののみが良き食物なりと心得て、却て大切なる滋養の如何を、考ふるもの少なきこそ、實に歎くべき事なれ。食物はもとより、口腹の慾を滿たさんが爲に、取るものにはあらで、肉躰の健康を增さんが爲に用ふるものなれば、芋粥と香の物なりとも、腹だにふくるれば、其目的を果せるやう思ふはひが事なり、尤も東京市人の如く、初物もしくは珍味を愛し、所謂ゼイタク即奢驕なる事はいふまでもな

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

く忌むべきことなれども己が分限相應に日々の活計にふさはしき滋養物を擇み、これによりて、肉躰の壯健を增し、天職を盡すに堪へ得べき器をなすはまた吾人の一大義務成ずや。東洋人のうちには、徃々驕奢を厭ふの念極端に走れる君子ありて、敝衣粗食を美德とし、これを子弟に勸めたる其結果にやことさらに、此れを衒ひて、そを一の君子の標識と思へる人今もなほ多し、鎖國蟄居に安んぜし昔は知らず、勝を肉食人種と大世界の表面に爭ふ今日に在りては、命こそ物種なれ、健康こそ唯一の楯なれ、家庭の女王たちよ、輕々にな觀過ぐしたまひそ。

(二)　消化の度を考ふべし

食品として滋養物を擇むべきよしは既に述べたり、然れどもなほ爰に大切なる獻立の一要素あり、そは消化の度を考ふべしといふにあり。何となれば、食品なるものは皆消化器內に投入れだにせば、必ず身躰の養分となるものなりといふを得ず、或は口腔に於て或は胃中に於て若しくは腸の各部に於て、夫々消化して後始めて身躰の養分となるべきものなれば、いかほど滋養質を含める物にても、消化器弱きか、又は調理法宜ろしからで、特別に消化し難き物は、滋養となる事なくて、徒に排泄せらるゝか、甚しきは却て身躰の害となり、時には發病の原因をなし、傳染病の媒介を爲すに至る、故に極めて心すべき事なり。然れども過ぎたるは猶及ばざるが如く、少年壯者或は勞働者の如く、身躰健全にして消化力盛なる人にまで、彼れは不消化なり、此れは消化あしゝと、きびしく避けて用ひしめざるに至れば、使用せざる筋骨が、日々に痩する理と等しく、消化力自然に減却し、遂には胃弱の人となり終るに至らん、故に予は殊に「消化の度を考ふべし」といひて、消化よき物を用ふべしとはいはざるなり。

(三)　嗜好に適せしむべし

吾人が日常の快樂、食事にありといはゞ、いかにも、上品ならぬやう思はるべしといへども、實際食事に關する愉快と不愉快とは、よほど家內の幸福に關係あるものなり。室家ある男子が料理屋にて食事する事を好むと聞けば予はまづ其所行を歎くより前に、その主婦が獻立に無頓着なるか、調理法に拙きか、或は其人の嗜好をだに知り得ざる、不敏の人ならんかとの想像を起さゞるを得ざるなり。もし滋養及消化の點に

於て大なる不都合だになくば、出來得るだけ、家長の嗜好に適ふやう考ふべし、たとひ如何なる滋養品なりとも、己の口に適はざる物のみを常に食膳に供せらるゝに當りては、浮薄なる魔物の巣窟なる事を知りつゝ、亦、茶屋料理屋に足を向くるに至るも、誘惑多き世に住める、靈心弱き人間には、酷に咎めがたき事ならん、懐ふて玆に至れば、晩食一回の献立に肝膽を砕くも、一食の調理に數時間を費すも、たゞ口腹の慾を滿たすが爲めにはあらでこれを家内にしては、其平和幸福の基となり、これを社會にしては、男子の品行を保護する一助ともなると思はゞ、婦人が喜んで考案と勞働とを犠牲として少しも憾なかるべき事なり。

この他にも猶嗜好に適せしむべき必要あるあり、そも肉躰には各生理上多少異りたる狀態あるものにてこれに關して、自然と要求する物質も異り、以て嗜好に種々の差異を生ずるに至るものなり、たとへば小兒が甘きものを欲し、吾人が冬期脂肪質を好むが如し、故に或限界までは好めるものを食せしむるは、生理上亦よろしき事なりと。

（四）　變化を要すべし

人躰は種々復雜したる原素より成れるものにて、日々に消費するものも、亦種々なる原素あるべし、故にこれを補ふ食物はたとひ滋養質に富み、消化の度、適當なる物なりとも、同種類の物品のみを日々に用ふれば、さして滋養とはならざるものなり、加之いかに嗜好に適へるものにても、毎日食膳に登らば遂には飽くに至るべし、されば日々の獻立は食味の變化と、食品の原質に變化あらんやうつとむべきなり。

（五）　經濟上に注意すべし

前に述べたる四項に於て、大過なしと思はば、其次には經濟上に注意すべし。世には價貴からざれば、良き食品なし、吾家にては經濟上に制限あるをもて、良き食物は調へがたしと、いふ婦人もあれど、こは思はざるの甚しきものなり、食品は購買法、調製法にて同樣なる滋養物も、同樣なる好味のものも、高價ともなり廉價ともなる事あり、而してたとひ些少の事なりとも日々の事なれば、一月とつもり、一年とかさねば驚くべき結果を得るに至らん、故に世俗の習慣上鰻を食すべき日には牛肉をとゝのへ、又牛肉を用ひんとする日にても新鮮にして安價なる魚類あらば是に代ふるが如く、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

或は出入八百屋の持來る物のみを頼まず、自ら市價をしらべて献立せば、何ぞ經濟上制限あるが爲に他の要素を欠くを歎かん、これは最も世才を要すべき所なり。

論説

女子高等教育

富田八重子

左は明治女學校高等科卒業生たる富田女史が卒業論文なりとす。

明治維新の改革は東洋積年の餘弊を打破し四千万の同胞皆其天權を全ふするに至れり然れども其實際に於て此の惠澤に浴するもの獨り男子のみにして女子は依然尙無形の牢獄に呻吟しつゝあるを見世の志士仁人大に之れが爲に泣き東奔西走漸く女子教育の端緒を開くに至れり爾來其進歩著しく又見るべきの好果なきにあらずと雖も惜らくは其教育法宜しきを得ざりしが爲往々我國土に適せざる女子を出すに至る忽ち女學反動の風荒く吹すさみ保守の波瀾々高く四面に張り恰も女子は教育すべからざるものなるかの如く思惟するに至れり何ぞ思はざるの甚しきや我同胞若し志士仁人の義擧に賛助し我等女性の爲に一滴の涙を惜まざりせば何ぞ夫れ茲に至らんや見よ我國數多き女學中純然日本人の手に成れるもの果して幾何かある此の重大なる大任を單に外人の手にのみ委ね恬として毫も顧みず偶々結果の面白からざるものあれば直ちに罪を女性に歸せんとはなす嗚呼何ぞ夫れ斯く無道なる此の時に當りて獨り熱心なる女子教育者不撓なる姉妹奮然として起ち其信ずる所を取て動かず滔々たる社會の潮流に逆ひ濛朧たる世の雲霧を排して滄浪の水靜けき所遙に義の太陽を認むるの機運に向はしめたり然れども方今人士の女子教育に對する所論を聞けば其理想如何にも卑近にして亦一種の足枷たるに過ぎず高等教育の如き殆ど絶對的に難ぜらるゝものゝ如し斯の如くにして女子教育万歳を歌ふべきか。

人の世に出づるやなすべきこと知るべきこと多しと雖も必竟するに各自天稟の人性を延し神の如く完全に且つ圓滿ならんとを勉むるの謂ひに外ならず世のあらゆる智識あらゆる事業事々物々一として此の數疇中に包容せられざるはなし蓋し人

類の發達進化を措て他に人世の目的なるものあらざればなり換言すれば人は進步の動物にして死にまでも墓までも否々墓の彼方にまで永遠無限に進化すべきものなり此の發達を利導するは敎育なり已に人あり何ぞ發達なからん巳に發達あり何ぞ敎育なからん人其圓滿の理想に達せざる限り敎育の廢すべからざるや明なり高等敎育の大旨亦一に玆に存す果して然らば如何なる反對論者と雖も女子の人類たるを否定せざる限り其敎育の制限すべからざる明々として日を見るよりも明なり反對論者よ汝何を以て神聖なる女性の天稟を犯さんとはなす

余は左に反對論の重なるものを擧げて一々之れに對へん

(一)反對論旨の燒點とも云ふべきは男女は其性を異にすと云へる說なり女子は到底男子の如く高等なる敎育を受くるに足らじと然り實に然らん西人嘗て兩者の相違を述て曰く

Man is strong, woman is beautiful; man is daring and confident, woman is diffident and unassuming. Man is great in action, woman in suffering. Man shun abroad, woman at home. Man talks to convince, woman to persuade and please. Man has a regged heart, woman a soft and tender, one. Man prevents misery, woman relieves it. Man has science, woman taste. Man has judgement, woman sensiblity. Man is being of justice, woman of mercy…………

槪言以て兩者を一括すれば一は陽にして他は陰一は武にして他は文なり然れども其昔父母を同ふしたる吾人々類が其境遇其關係を異にしたるより或は白晳人種となり或は黃色人種となり或は創見に富み摸倣に長じ生理上に心理上に非常の懸隔を生じたるを見ば亦之の兩性間の相違の如き或は前者と其轍を同したるなきや知る可らず然るを猥りに現在の相違を見て之れ則ち男女本來の相違なりとは云ふべからず「コレッヂ」曰く英勇に於て最も女性の原素多しと吾人は「クリスト」に於て此眞理を見る陽武必しも男子の特性にあらず陰文必しも女子の特質にあらず吾人元より男女の相違あるを信ぜざるものにあらず然れども其相違は必ずしも度に於ける云ひにあらで寧ろ種類に於ける相違なり優劣にあらずして其發達を異にしたるなり已に其發達を異にせりとせんか各自其長所なかるべからず果して然らば女子特有の長所に向ては男子よりも倘一層高等なる敎育を要するに非ずや若し論者の說の如く兩性の相違にして果して先天的のものなりとせんか其相違ふや如何なる點なるか男女敎育の境界線は果して那邊に引くべきや吾人未だ之れを詳にする能はず此れ實に吾人が長く硏究を要する問

題なり要するに男女を不同とするの說未だ以て女子高等敎育の可否を判するに足らざるなり。

(二)男女の智力に優劣あり女子は男子に比し創見に思考に反省に其他此の種の能力に於て大に劣る所あり女子は寧感情的自覺的動物なりと夫れ或は然らん然れども此の差違たるや決して偶然にあらざるなり記臆すべし習慣は第二の天性を形くるを論者少しく既往に鑒みば思ひ半に過ぐるものあらん余は論者の說に於てすら彌女子高等敎育の必要を認む女子の能力にして若し男子に劣る所ありとせんか圓滿に人世を進むるの意義に於て其足らざるを補ふの要あるにあらずや况んや近時敎育の最盛なる英米に於ては其傾向將に一變せんとするの現象あるに於てをや從來男子の特有視したる數學に於てすら續々女子優等生を出すに於ておや我國僅々數年に於ける敎育は其組織不完全なりしにも拘らず實に驚くべき進歩をなし西人をして將に舌を卷しめたるもの少なからさるに於てをや論者眞に女子の技柄を知らんと欲せば乞ふ先づ充分に敎育し而して後之れを許せよ今や東洋文明の先導者を以て誇稱しつゝある我大和の文物は一として大平洋を橫らざるものなしと果して然らば此民に附するに如何なる能力を以てせんか創見か深思か否々斯の如きは此の民の得て受くべき名稱にあらず然らば何を以てせんか吾人の言を待たざるなり此の民にして帝國大學を要せば論者の所謂智力劣等なる我等女性に對する所論に於ても亦少しく悟り玉ふ所なきか。

(三)女子は生理上男子よりも纖弱なり强て之れを敎育せんか勢ひ其躰健を害し其害や獨り女子其人に止らず延て之を子孫に遺傳し患を百年に殘さんと然り此れ實に吾人が愼重なる研究を要す然れども余は亦女子の躰力に於ても等しく習慣の與りて大に力あるとを信ずる者なり吾人は鍛工に於て不均同なる運動により不均同なる局部の發達あるを見る吾人の四肢をして適切に之れを働かしめんか忽ち四肢の衰弱を來たすこと生理學の證する所にあらずや然るに深窓に養はれ柳腰微足を以て理想とせし女子にして爭でか强壯男子の如きを得んや此れを求むる恰も木によりて魚を求むるの愚に同じ曾て聞く彼のアフリカ內地に於ける婦人は其强壯なること歐洲男子の如くすべて筋力を要する勞働は悉く婦人の事務に屬すと之れに反し男子は躰力非常に弱く常に定居して裁縫炊事を事とすと若

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

し此の地にして一朝歐洲の文明貿易風と共に侵入し教育の問題起らんか男子は女子よりも生理上に於て孱弱なれば到底女子の如く高等なる教育を受くるに堪べしとの說勃々として起らん要するに男女躰力の强不强は未だ容易に決定すべからざるもの丶如し余は亦遺傳の故を以て女子教育を否むこと能はざるなり蓋し女子は健康と不健康とを遺傳するのみならず亦道德的智力的の善質惡質をも遺傳することあればなり健康なる母其健康を遺傳せずして其魯鈍を遺傳することあればなり人類を繼續するに必要なるは健康なれども人類をして進步せしむるに必要なるは道德的及び智力的の修養なり女子をして物質的發達を遂げしむるのみ目的として最貴重すべき人類の發達を顧みざるが如きは余の取らざる所なり否吾人が修極の目的に反するものなり若し人全世界を得る共生命を失はゞ何の益あらんやとは吾人の寸時も忘るべからざる聖訓なり吾人の內なる生命發達せざらんかたとへ其躰健小錦の如くなるも何の益か之あらん寧ろ少しく躰健を害ふも不朽の生命をして永遠に進化せしむるに如かず况んや近時の統計は屢々祝すべき快報を告るに於てをや明確なる事實は吾人の眼前に之を證しつ丶あるに於てをや

(四)女子は妻母たるべきものなれば左まで高尙なる學問を要せず寧日常卑近のことに明るき實動的婦人を要すと此の說に至りては余の毫も服する能はざる所なり否服せざるのみならず殆 其論旨を解するに苦む全躰に通ぜるもの亦其箇々に通ぜざることなし女子完全に教育せられんか女性天職の部分たる妻たり母たること何の不都合か之あらん否啻に不都合なきのみならず眞正の良妻賢母とは必ず高等教育ある婦人ならざるべからず吾人は彼の徒に詩句を誦しピヤノを奏して裁縫炊事を知らざるものを以て理想の佳人とは云はじ學問とは天の妙理を研究し之れを身に修むるの云ひなり實際と關係なき空理空論は學問の意義を誤解せるなり苟くも良妻賢母たらしめんと欲せば宜しく之れを教育せざる可からず妻女とは奴隸にあらず召使ひにあらず純然たる男子の伴侶者なり夫婦てふ一躰の半身なり例へば車の兩輪の如し半輪遲緩にして其速力他の半輪に及ばざるか活潑なる進行得て望むべからざるのみならず其不調和は遂に全躰を破壞するに至らん吾人は詩人に於て多く不幸なる家庭を見る其原因種々あるべしと雖 一大原因

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

とも云ふべきは夫妻間に於ける志想の不調和に外ならず余は理想山の如きミルトンの家庭に於て現に此事實を見る女子の進歩を拒むもの亦等しく男子の發達を拒むものなり余は之れを西哲に聞けり　The woman's cause is man's; they arise or sink together, dwarfed or godlike, bond or free, for she who out of lethe scales with man the shining steps of nature........if she be small, slight-natured miserable, how shall man grow?

と實に然りラスキン又曰く　You can not think that the bucling of knights armer by his lady's hand, was a mere caprice of romantic fashion, it is the type of an eternal truth, that the soul's armer is never well set to the heart unless a woman s' hand has breedit; and it is only when she brnced it loosely that the honor of manhood fails.

此れ少しく棒大の嫌なきにあらずと雖亦大に眞理を含む余は亦家庭敎育者として一層敎育の必要を感ず此の大任ある女性にして其德高からざるか其智深からざるか其結果や推して知るべし嗚呼其愛兒をして天使たらしむるもの誰ぞサタンたらしむるもの誰ぞ或人曰く　The mother, in her office, holds the key of the soul; and she it is who stamps the coin of character.

と實に然り子女後代の生死は乳養時代に於ける記號（インプレッション）の反影なりと云ふも不可なし今や銀行家或は商人を造らんが爲めに大に敎育の必要あるを知ると雖人性（ヒューマンネチュー）の敎育者を造るに左まで高等なる敎育を要せずとは云ふ愚も亦極まれるに非ずや人性を敎導すると銀を數へ砂糖を量ると其能力を要する果して何れぞや要するに女子敎育の必要なる理論に實際に確然として動かすべからざる眞理なり最後に至り余は尙一言せんと欲するものあり他なし日本女子大學の設立之なり方今官敎派女學校に於て其課程高からざるものなきに非ずと雖此れ未だ吾人の滿足し能はざる所のものなり蓋し個人の發達も亦其國民發達の歷史に伴ふものなり一國には必ず一國特有の長所あり其の足らざるを補ふと共に其長所をして彌發達せしめざる可からず之れ余が切に日本的女子大學の設立を望む所以なり

教育の最要時機（其一）

増田タキ子

左の一篇も亦前なると同しく明治女學校今回の高等科卒業生増田女史が卒業論文なり

ミルトン曰く朝に好く其一日をトする如く幼兒は則ち後代の大人を表すと、幼稚者は即ち後代の大人第二の國民となる者なり、此の故を以て幼者教育の如何は後來組織する社會に大關係を及し一家一國の盛衰興亡文明の起伏高低は實に是に起因す。此の人世の首途なる幼時の至細なる感化は實に偉大の影響を生じ終生變ず可らざるに至る、彼の天眞爛熳たるホームの天使の如き無垢璞玉の如き者と雖是を濁世に放任する時はサタンの如くなるなり、サタン元と是れ天使の墮落したるもの、其幼時の方向の異同によりて善惡二道の大懸隔を生ずるに至る、恐れざる可けんや、故に此の搖籃時代の教育は一日も忽にす可らざるなり。

論者曰く人類は形躰心理共に遺傳に因て支配せらる、彼の詩人バイロンの如きは最も遺傳の理法の爭ふ可らざるを證するに足らん、幼稚教育到底遺傳を改るを得ずと、然り人類一生の幾分は已に是によりて預定せらるゝものなりと雖是を治す可らずと判定すること能はず、抑も遺傳は過去に於ける人類進化の結果にして祖先の累積せる一重の力に過ぎず、詮ずるに前時代教育の痕跡の他あらざるなり、博士ブラクイン氏は生理的勸告によりて憂鬱病を癒せり、ヂルベゥ氏は催眠術を以て感化の効を奏せり、此の理によりて考ふるも教育遺傳を改むるを得ざるの理なし、況んや世人が治す可らざる遺傳の傾向と稱するもの多くは幼時の不注意に依るもの尠なからざるに於てをや、加之、人は境遇の動物なり、性善なる幼者も其境遇の惡しきが故に惡化せらるゝ如く其惡を翻して善ならしむるを得るや必せり、古來の英雄偉人の發達の跡を見るも其慈母の鞠育如何と其包圍の善良なるとより感化せられざるもの無きが如し、要するに天災にあらざる以上は到底不完全なる人類に於て全く是を治すること能わずと雖教育の方法宜しきを得ば遺傳及改むるを得ざるの理ある可からざるなり。

然らば如何に是を教育す可き乎。

是れ實に賢明なる母の奮起するにあらずんば到底行わる可らず、母は即ち最初胎内に宿す時より已に教育すべきの大教師

にてあるなり、母の胎内にある間の非常なる感化及び其當時の幸不幸癖等は悉く胎兒に遺傳して其性質を造るが故に兄弟にして全く異性を備ふるに至る、是によりて是を見れば胎内教育決して忽にす可らざるなり、抑も家庭は人の世に出る後直に入る可き最初の學校にして人の一生に預て大に力あるものなり、ウオーヅウヲルス曰く家にありて一身を健造し事物の精神を吸收し而して後深く造るの智識を得べしと、故に家庭にして若し不健全なる時は國家根本の大不幸にして人之によりて途に捨てらるゝの鹽ともなり又家を輝かすの光明となる、是れ天地の相違なり、實に神聖なるホームにあらざれば決して圓滿なる教育を施す能わざるなり。

ビスマーク曰く英國に羨望に堪へざる者あり獨逸に其所謂るゼントルメン、とホームと云へる語なしと。我が國又此の感なきに非ず、何故に然るや。女子教育の發達せざるを以てなり、夫れ婦人は一家の女王にして其家内に於ける感化は實に父よりも偉大なり、幼者は己が周圍に圍繞する事々物々無識無知の内に感染せらるゝこと恰も虫類が其食する樹草の葉色に同化するが如し、此を以て見れば幼兒成長後の品德は一に其母に關せり、而して此の教育の内最も功用ある氣風風俗を造るは母の膝下に於ける間の教育にあり、若し母にして敬神愛人の念篤く眞理を重じ愛國の氣概なることあらずば兒は最初何處より之を得んや、然れども教育ある母も尚ほ情實止むことを得ず此の一事に而已從事すること能わざるが故に無教育なる乳母傅婢等に委ねざる可らざるの場合あり、然るに彼等の多くは注意せず是を愛するの愛は愛に溺れ又は諂諛となり其嚴格は動もすれば慘酷となる恐あり是によりて幼者の情性の害されたるもの少なからず、昔德川家康爰に注目し民間より稻葉正成の妻を召出して其孫の教育に從事せしめたり、世の母たる者深く此點に注意せざる可らず。然るに又他に家庭教育の害となるべきもの老人と幼者の關係之なり、父母温嚴是を教訓するも老人の過愛は反て慈愛の關渉たるの傾向なきに非らず、爰に於て無心なる幼者に老人の教訓と父母の教誡の何れが可なるやを判別すること能はずスペンサーが所謂る朝命暮改の命行れて、半途に迷ひ躊躇せざる可らざるに至る、如此にして安んぞ圓滿なる教育を行ふことを得んや後代の國民の安寧を慮るものは是が改良に注目せざる可ら

ず、若し夫れ宜しきを得る時は和氣朗々四時春の如く花笑ひ鳥歌ひ罪なき汚なき眞に人世に於ける樂園となる可し、斯の如き家庭に教育せらるゝ兒の幸夫れ幾何ぞ。（未完）

寐むけざまし

昨今の暑氣に遠遊もならぬワンパク太郎裏の樫の木の大枝に跨つて頻りに兩足をぶらくつて居たり。來かゝる隣のおかみさん、

　オヤ太郎ちやん、氣をつけないと落ちて頭を割り升よ。

太郎

　ムー、モウきのふおつこちたんだ、だつて、をばさん、ひとも入りやアしないよ。

山のかみ

　おめい、また鎌をどつか忘れて來たナ、しやうがねいじやねいか、ヤア、どけへ鎌アうつちやつて來たんだていば？

のろ作

　おらアしんもんか、知んねいてば、

山のかみ

　知らねいもよく出來た氣イつけてさがして來ずか、この野郎、ヤア、コラ、一躰どけいらか、見當つくべい。

のろ作

　おらあ晝寐イしたとけへ置いて來たべいかとおもふな。

山のかみ

　そんじや、どけい寐て來たんだ？

のろ作

　鎌ア置いたとけいよ。

母

　坊やモウお起きでないか、小鳥なにかは、モウ遠に起てるよ、

坊や（寐ぼけ聲で）

　ナンダ僕だつて、木の枝なんかによつかゝつて寐ていりやア、早く起るワ。

○若みどり

横濱フエリス女學校々醫六角謙吉氏が、此度び發明せられたる「若みどり」の廣告は、本誌の此號に見ゆ。右に對し若松

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

しづ子が寄せたる文にいはく、

紅粉ならず錦繡ならずしてよく美を裝ほふものは綠濃く色艶やかなる黑髮にや候はん、殊にもの丶美なるは永久のよろこびなりとか申候へば、今般ヘヤトニックの御發明御發賣は公衆の幸を增し候事と格別慶賀仕候。數年來先生の御懇篤なる御治療を辱ふせし私どもは先生の御調合ときゝて藥の効能を疑がふ可くも候はず況して廣ろく御試用被遊親しく其効能御實撿相成候上の御發賣と承り候上は私ども最早試用いたす迄もなく直ちに知り人へ吹聽いたし居候。たゞ御好意を無にせじとて彼品惠贈せられ候當日より私事早速自身に試用いたし昨冬の病にいたく薄ふせし髮の修繕にとりかゝり申候それ故春立ちかへられぬ末枯野に若みどりの生ひ立つ風情を家族のものに見せ候も遠からじと樂しみ申候誰やらが申候事に、

" You never make a mistake by calling a woman handsome."

とあるを思ひ起し候て女の己惚れもこれまでかと驚ろき候御笑ひ下さるべし御祝までかしこ。

田家のこよみ

富糊子編

○大暑七月廿三日　○桐始結花　○土潤溽暑　○大雨時行

○七月廿日より同卅一日迄農事

○播種　二度つくりの胡瓜は此節に播種してよし、

○移植　韮、芍藥、二度作りの馬鈴薯は倶に此季に移植すべし、

○雜事　孵化用の母鷄は炎暑の候多く羽蟲を發生すれば、之を防ぐには産褥の下に石油若くは硫黄の粉末を散布し置べし、然るときは母鉢の温度にて石油又は硫黄の氣の蒸散して羽蟲の生ずるをとなし。柿は此節に肥料を施せば果實の落るとなし。蚯蝸に刺れたる時に用ゆる藥材は豫て用意し置べし。バフ草の葉を採り之を採みて局所に附着すべし、又ナメクヂの黑燒を貯へ置き其疵口に塗る時は忽ち治すべし。又野蒜の根を卸して患所に塗るもよし。又柿の澁を塗るもよし。柿澁なきときは澁柿をつふして塗るも可なり。馬に嚙まれたるときには、鐵漿(おはぐろ)を以て疵口を洗ふべし、然るときは痛み直に去りて愈ゆべし。

○園藝法

而して接木法を大別して三種となす、枝接、壓接、及芽接とす、

第拾七　枝接法

枝接法とは豫め母樹より分離し置きたる枝の全部、或は一部を用ゐて砧木の幹、或は枝に嫁接するものとす、今枝接法の大切なる要を擧ぐれば

(一)接穗撰擇注意　接穗は前年早く發生し、且つ勢力强盛にして降雪既に樹質堅熟に至れる枝條を接穗に用ゐるを以て最上とす、枝條は堅硬、空中等にして朋芽接近して生じたる强壯の徵候あるもの、果木の上部に生じたる眞直なるものの枝條を嫁接するときは勢力强盛に過ぎ、眞直に生長するの傾向ありて結果に至るを遲く。下部或は枝陰に生ずる枝條を用ゐる時は果實を結ふと極めて早しと雖とも、樹勢軟弱にして永く結果を維持すると能はす、之に反して獨り中央の日當のよき部分に生ずる枝は生氣强きに過ぎず弱きに失せず結果に至ると早く且つ頗る長命なり。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

通信

淡海子編

●高知縣通信

◎師範生の體格　本月八日高知師範學校女生徒の體格撿查を施行せられしに何れも一層の發育を來し强壯の兆を顯はせしと云ふ、

◎補欠入學　此度本縣高等女學生の補欠生を募集せられしに、第三級、六名第四級、四名の入學ありたり、

◎女教員の同盟休業　市内第一高等小學校女教員八名は本月初め同盟して休校せり、そは或る女生徒を酷問苛責せしとかせぬとかにて男教員との間に起りし者の由なれども、其原因餘程入り込み居る由、それが爲めか土佐郡長某は終に辭表を其筋に差出せりときく、

◎高知婦人實業會　同會の近況を略記せんに、同會機業部にては先頃より婦人六十人程の工女を雇入れ其事業を擴張せられしが、近頃は毎日二十五反程の上り高なりと、且同會工女は十二歲位より六十歲前後の者にて賃銀は、最上十五錢より最下三錢位までなりと、尙裁縫部には四十名位ありとの事、

◎幼稚園組織變更の議　市内に設立しある幼稚園現今の組織は、或は兒童能力の發達を妨害する者なきに非るかとの疑問或人々の内に起りたれば、當市參事會に於ては其調查方を委員長に囑托して十分に取調べしめしより、即ち委員長は各地方の幼稚園並に教育家の說を參酌考合せしに、現今の組織は寧ろ學園の傾きありて、幾分か兒童能力の發達に妨害を與ふる者なきにしも非れば、從前の課程を廢して遊園なすの方宜しからんとの事にて其調查も略整ひたれば、不日右の議を市參事會に提出する由、

◎兩實業家の演說　此度實業演說の爲め來會せられし、井上甚太郎、星野長太郎の兩氏は、高知市通町高知刺繡女工塲にて演說せられたり、井上氏は我國刺繡業の工賃に五百万圓以上の歲入あること、其他有益なる事實、星野氏は生絲の標本等を示し其染方等に付辨ぜられたりと云ふ、因に記す同會は目下六十餘名の工女を有し、十三四錢の賃錢を得るはたやすき事にて、十二三歲の小女にても學校歸りより來るも六七錢を得るに至ると云ふ、同會は高知教會長老長野源吉氏の管理する所なり、

◎産婆生募集　高知産婆學校に於ては、今回十七名の自費生及七名の給費生を募集せり、猶同校にて去る廿九日五名の卒業生ありたり、

●三重縣通信

◎産科私學校　同校にては去る十九日卒業試業を行ひ了て、卒業免狀授與式を行ひしが、式上山內校長の勅語奉讀と産婆心得、及來賓演說ありぬ、卒業生は甲科にて伊藤しも、芝原かと、木戶はるへの三名乙科にては、杵島りう、野田みれの二名なりき、

◎津市の女況　津市上流社會の婦人の組織にて、月々講師を招聘して、其の講演を聞き一時は頗る盛大なりし、三重婦人會は昨秋より一向に會合ありしを聞かず餘はどうなりしにや、佛教婦人會は發會式の前後には事務所なる報恩寺に看版懸けありしも今は有らず、如何せしならん、養正同窓會女子部は男子部に分立の後も相變らず不振の姿にて例會に出席者少く、女學同窓會は近頃の創立にかゝりしものなるが、只永續きあらんことを祈るのみ、かく不振の女界中に立ちて少しく見るに足るべきは、組合教會員の設立にかゝる基督教婦人會とす、されど未だ社會的の運動を爲すに至らず、吾人は津市婦人無氣力に驚かざるを得ず、縣廳所在地なる津市にして已に斯くの如し其他は豈に言ふに忍びんや

◎婦人の夜行漸く舊に復す　吾人が前號に報道せし如く津市にては鐵道工夫等が良家の婦女を耻しむるより、婦人の夜行は殆んど無かりし位なりしが、元來彼の强姦事件は民藪の新聞が書き立つる程のこともなく、大抵は事實相違なるにより恐怖したる婦人方も大に安堵して、今や七十五日も經ぬに婦人の夜行殆んど舊復せり實に喜ばしきことにこそ、

◎三重紡績會社の女工　は現今千二百四十二人なり、

◎女生徒の養蠶　四日市高等小學校の二、三、四年の女生徒は本年養蠶に從事せし由なるが、先づ原紙一分五厘、四月二十六日發生、虫數四千八百女生四十八名を六組に分ちて之を監督し、去月六、七日頃上簇せり桑は二十貫七百目を要し、上り高は一斗五升二合なりし、右繭は室山の製糸所へ一斗四圓八十錢の相塲にて賣り渡せしが至極の出來なりとて褒狀を受けたり、

●福井通信

秋山貞二報

◎里村なほ子　本縣尋常師範學校教諭より、栃木縣尋常師範學校長に榮轉せし、里村勝次郎氏の令閨里村なほ子は、本縣高等女學校助教諭兼舍監本縣尋常師範學校訓導(三級俸)なりしが、今度夫と共に栃木縣へ赴くに付依願本官並兼官を免ぜられ、職務格別勉勵に付金拾五圓賞與せられたりし、

◎工女の困却　當縣下今立郡の婦女は、毎年五六月の交滋賀縣へ赴き其製糸工女に雇はれ、九月頃歸國するを例とせしが、本年は江州養蠶の不作なるより、同地へ赴きたるものも雇主なくして空く歸り來り、且つ當縣下も養蠶の不作、羽二重の不振にて何れも工女は困却し居れり、

◎監獄囚徒　本年六月末日當縣監獄署在監現員は、總數四百廿八人(男三百九十三人女三十五人にして之を細別すれば、囚人四百一人(男三百六十九人女三十二人)別房留置者、男三人携帶乳兒二人(男一人女一人)刑事、被告人二十二人(男二十人女二人)なり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女報

淡海子編

●華族女學校行啓　皇后陛下には去る十八日午前八時三十分御出門華族女學校へ行啓あらせられたり、

●西村華族女學校長　同校長には去る十二日午前十時宮內省に出頭して土方大臣に面會したるが右は十八日同校に於て擧行すべき卒業證書授與式へ　皇后陛下の行啓仰出されしに付ての協議なりと、

●皇女の御避暑　常宮、周宮、兩內親王殿下には去十五日午前九時上野發の滊車にて日光へ御避暑に赴かせ玉ひしと、

●女子高等師範學校の第二部開校　女子高等師範學校にては、從來高等女學校に連續すべき小學校第一部(尋常科)及び單級編制の小學校第三部の二小學校のみなりしが、來る九月より小學校第二部を開校すべしと云ふ、

●明治女學校第六回卒業式　は去十九日午後七時より執行せられたり、今回同校の卒業生は左の諸子なりと云ふ、

高等科
西岡さふ　富田やゑ　増田たき

普通科
大岩かづめ　高木こう　佐藤きえ　門田えい
石川たか　菅沼はな　小田切なか　片尾ひさよ
新海ふみ　土屋しづか　紳谷くは　佐伯さくら

普通撰科
羅田さり　田川かう　紀內すゑ
渡邊あき　田中たけ　浦木さき　大島あや
久保はるよ　八代みさを　矢島ちよ　町田たつ
鈴木げん

武道科
(目錄)　松井まん　佐藤すけ　村瀨つる
竹內うめ
(中段)　山口よし　中山みつ　藤島ゆき
(初段)　高橋いさ　佐伯さより　松井せつ
田中たけ　紀內すゑ　佐藤きゑ
八代みさを

琴科
(中許)　紀內すゑ
(表組正許)　原さわ　藤戸みす　仙石ちか
江たへ

●フェリス女學校卒業式　は去る十一日午後七時半より祈禱を以て開かれ、夫より卒業生各自交々起て歡迎の辭、或は音樂、文章、詠歌等ありて後、校長ブース氏卒業證書を授與せられ、次に明治學院總理井深梶之助氏、卒業式に臨みて、てふ演說ありたり、次に高等科卒業生正村むら子の答辭ありて、終りに主客一同、君が代、を詠ひて此式を了りぬ、當日の來賓は二百餘名にて、三橋神奈川縣書記官野村橫濱稅關鑑定官等も臨場し、式場內には日米兩國の國旗を交叉し、正面には聖上の外國使節に謁を賜ふ圖、及華盛頓の肖像を揭げ式場頗る整然たり、因に記す今回の卒業生は左の如し

高等科　正村むら子
本科　田中さん子　矢野きやう子　東儀たか子　渡邊せい子　河村なほ子
預科　五名

●共立女學校卒業證書授與式　は曾て記せしが如く、去月卅日午後七時より同校講堂に於て執行せられたり、首め式を祈禱を以て開かれ、夫より教師及び卒業生の、唱歌、奏樂、ピヤノ、オルガン、琴の合奏等ありて後、卒業證書を授與せられ、嚴本善治氏の演說ありて、夫より又唱歌、奏樂あり、祝禱を以て此式を了れり、今回の卒業生は左の通り、

林信子　井鹿子　小早川京子　近藤春子
小菅仲子　石井角子　岡田於菟子　齋藤熊子
山本梅子　米山鮎子　吉武芳野

●梅花女學校卒業式　は去十五日同地土佐堀二丁目基督教育年會館に於て執行せらる、今回の卒業生は左の如くなり、

邦語全科　磯田ゆき　岡村らく　仲井かや　村山小梅
山脇よれ　淺井やそ　菊池はる　島きく

英語全科　島きく

以上本年三月卒業

邦語全科　今村こう　服部數枝　大井君枝　岡田盤江
中村重樹　村上駒尾　山川みち　籔田ぎん
水野かめ

英語全科　岡村らく　川島よし　中村重樹　菊池はる

●獨逸小學校統計　近頃公にせられたる、孛國小學校統計誌は頁餘の獨逸諸邦の小學校を網羅したる一覽表を揭載せり、此統計に據るに獨逸全國に於ける小學校の現數、五万六千五百六十三箇所、(孛國三万四千七百四十二箇所)、生徒の數七百九十二万五千六百八十八人、(孛國四百九十一万六千四百七十六人)、教員十二万三十二人(孛國七万七百六十七人)內女教員一万三千七百五十人(孛國八千四百九十四人)にして孛國外の獨逸諸邦に於ては、教員一人の擔任する生徒の數平均六十一人に當り、孛國に於ては七十人に當る、獨逸全體の小學校費は小學校の管理費、同監督費及教員養成費等を除き少くも、大約二億四千二百四十万馬を要し、此內國庫より支辨せらるゝもの少くも六千九百三十万五千馬に達す、小學生徒の總數を獨逸の人口四千九百四十二万八千四百七十人に配當すれは、百人に附き生徒の數十六人〇三(孛國十六人五四)に當り生徒一人に對する小學費は孛國に於ては、二十九馬七十四布、孛國外の獨逸諸邦に於ては、三十二

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

馬に當り、又小學費の負擔額は学國に於ては、一人に附き四馬八十九布、学國外の獨逸諸邦に於ては五馬なり(七月一日官報)

●若松女學校　曩に若松の有志者が同地に一の女學校を創立せられんとの風說は曾て傳聞せし處なるが、過般來開校せらるゝに至りたり、今其創立主旨書を得たれば左に揭ぐ、

若校女學校創立主旨

無冠の女王と稱せらるゝ万國禁酒會長ウヰラード孃曾て曰く「十九世紀に於て多くの發見をなしたりといへども女性が彼自身を發見したるより大なるものなし」と嗚呼これ何によりて然るや唯女子教育の隆盛となりしこと其原因なりといふべし而して女子教育の必要に至ては今改めて呶々するを要せざるなり我若松の如きは縣下の大市にして會津尋常中學校なる者ありて男性の爲に設けられたる既に久し然るに未だ曾て女子のために何等の計畫あるを聞かずこれ實に男性に厚ふして女子に薄しといふへし豈に地方の欠點ならずや此故に我等微なりといへども自ら力を度るに暇あらずして若松女學校なるものを興す所以なり其目的とするところは徒に空理に馳するが如きことを避け勉めて有用の學を授け良妻賢母たるに適するの女性を陶冶し兼て地方女子の弊風を掃蕩し女性たるの品位を進め東洋古來の國粹と西洋近時の神髓とを併せ有せしめんことを期するにあり願くは地方にある嚴父慈母諸君が其の愛する娘孃をして普く學に就かしめ以て彼自身の天賦の才能地位を發見せしめ彼自身の生涯をして幸福なるものたらしめられんことを、

●本邦の淫賣婦　或人現時ホノルヽ府内に在て醜業を營む我淫婦の數を算せしに無慮百四十名を得たりと云ふ、

●淑德婦人會講話　去る三日午後一時より小石川表町淑德女學校內に於て講話會を開き、大内靑巒、堀内靜宇、久保丁寬三氏の婦德に關する講話あり餘興に盲人の薩摩琵琶もありたりと、

●女學校設立の計畫　私立岡山教育會にては一の女學校を設立するの計畫ありて此度大村忠次郎、進藤貞範、岡村正義、森下熊三、光岡金雄、菅英次の六氏を設備委員とし目下奔走中なりと、

●松田道子女史の洋行　米國婦人の奬學金を得て三年間同國ペンシルヴエニア州エマス大學へ留笈する、松田道子女史は去る十四日橫濱の郵船にて渡米の途に上りしと云ふ、

●女子裁縫學校設立の計畫　千葉縣千葉町の女教員等は同町に女子裁縫學校を設立して、和洋服の裁縫授業を主とし傍ら家政、修身上の事をも授け大に淑德を涵養せしめんとの計畫にて、已に其設立事務を當町北道場九百廿七番地小學新誌社に於て取扱ふ事に决したりと、

●札幌スミス女學校卒業式　同校は去月廿九日午後三時より卒業證書授與式を擧げられたり、今回初めて二名の卒業生を出せり、赤城むあ子、濱崎ふさ子の二氏なり、

●東京女學館　女子奬勵會の附屬なる、同館にては、去十二日第二回の卒業授與式を虎の門なる該校の中堂に於て擧行し、會長久方子爵の式旨、外山博士の演說等ありたりと云ふ、

●大坂照暗女學卒業式　は去る八日午後二時執行せしと云ふ

●熊本女學校卒業式　は去る八日午前八時擧行せり、今回の卒業生は、本科四名別科十二名なりと云ふ、

●仙臺女學校開校式　は去る一日執行せられたり、

●女學校設立の計畫　私立岡山教育會にては、一の女學校を設立するの計畫ありて、此度大村忠次郎、進藤貞範、岡村正義、森下熊三、光岡金雄、菅英次の六氏を設備委員とし目下奔走中なりと、

●アビシニヤ婦人の權利　アビシニヤ國にて女權の男權より擴張せられ居る事實は之を歐羅巴に比すれば更に甚だしき者ありといふ、エスフエーチニーといふ人の話によれば、同國にては一家及び一家に屬するものは些末のものに至るまでも盡く婦人の所有品なれば一家に對しては、夫は殆んど權利を有せざるのみならず、萬一妻の意に逆らひ機嫌を損ふときは忽ち戶外に追出されて容易に家に歸ることを許されず、されば斯るときは夫の方にて痛く後悔し、且つ其罪を贖はんが爲に、牝牛一頭か或は駱駝の半價に相當するものを求めて家に至り妻の許諾を經て戶內に入るを常とす、女權の甚だしきこと以上の如くなれば萬事夫の行爲を譴責するも婦人の特權にして、夫を離婚するも亦婦人の自由なり、去る場合には夫は妻に對し離緣せらるべき覺えはなきなど己れの罪を辯護しひたすら哀求して止ざることゝ、猶東洋の婦人が男子に隷屬するが如きものなりといふ(讀賣)

●英國婦人自由同盟會の決議　七万五千の會員を有し三百六十九の諸集會と同盟の約ある英國婦人自由同盟會は去五月廿九日定式評議會を開き、下の如き決議を爲せり、曰く

同會の目的中に既婚未婚若くは寡婦に論なく苟も男子と法律上同様の資格を具へ市民たるの權利を有する婦人には總て國會及び地方議會の撰擧權を賦與し且つ其他婦人に關する立法を正當ならしむ可き事

同會は愛蘭自治案の無事に第二讀會を通過したることを嘉し今後益々殘翁の政府を補助して速かに彼の大法案を實施するの運に至らしむ可き事撰擧權を擴張して婦人に及ぼす可きは自由の眞理上然る可きことにして最早今日は此事を自由黨の綱領に加ふ可きの時に達したり、同會の常務委員は此目的を貫徹するが爲め殊に力を盡す可き事

同會は男子と同樣同價の仕事を爲し得る婦女の勞役者には男子ト同額の賃錢を得せしめんが爲めに力を盡す可き事

同會の會長は、是迄グラツストーン夫人なりしも、今回其職を罷しかば、アバーヂーン伯爵夫人其後を襲ひ、勢力益々盛大に赴けり東洋婦女亦少しく鑒むる處ありて可なり(郵便報知)

●宇都宮高等女學校落成式　は去る一日を以て擧行せられたり、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

櫻井明石君譯

希臘孝子 ピリピ物語

此書は希臘の孝子が物語を、譯者三年の辛苦を經てものせし世に稀なる孝子か美談にして、既に數十種の新聞雜誌に公評ありたるものにして、對基督敎忠孝論物爭の際に當り此書の生れ出でたるなり、乞一本を購ひて讀味あらむことを

女學雜誌社

大形洋綴美製
正價金卅五錢
郵稅　金六錢

學者笠

一個　金三錢五厘
市内輸送　金二錢

此學者笠とは、友人某渡米の節同地に行るゝものを觀、歸朝後これを造らしめしものにして、之が用法は額に懸けて兩耳に挿みて燈下に向えば、眼球に少しも光線の注射することなし、學者、商家、工藝家は晝夜之を懸くれば眼の疲れを減ずべし、今回是が製造者より原價にて販賣を引受、之より生ずる幾分の利益は、悉く或る孤兒院に寄附せんとす、希ば續々御使用あらんことを。
但し市内の學校會社にて申し合せ拾個以上御購求あらば現品無遞送料にて送り届くべし、請賣の方へは特別割引すべし

女學雜誌社内
藤井米八郎

巖本善治君講述

教育學講義

正價金八錢
郵稅金貳錢

右は君が、明治女學校、高等科女生に口授せられたる講義中、之れを筆記して、昨年七月より本年四月に至る、白表女學雜誌附錄として、續載せしものにして、先頃より之を一冊子として世に公にせよと請はるゝ者あれば。謂ば君の未定稿なれど、今般廉價を以て同好諸君の求めに應ぜむとす、

女學雜誌社

高等女學校小學校及幼稚園生徒幼兒募集

當校附屬高等女學校小學校第一部（尋常科）各級及幼兒に缺員あり入學を許す

小學校第二部（男女）今般開校し尋常科一、二、年級は各四十名三、四年級は各二十名募集す授業料は各級三十錢入學志望者は來九月五日迄に履歴書差出すべし幼兒は隨時入園を許す

明治二十六年七月

女子高等師範學校

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

裏錦

第九號（七月十五日發行）要目

●貴重なるレーブタ　錦子
●夏窻雜感　德子
●唐人の茶會　小衣子
●模型人體　志ら菊
●深山の紅葉（中三巻つゞき）　桐廼舎かつら子
●唱歌朝顔幷歌譜

●教育宗教衝突論並其駁論の勝敗
●おひたちの記　トウストイ著
幼年篇（第四回講堂）　林丘子譯
●僞皇子（曲戯）　プシキン著
リトワ街道茶屋の場　殘月庵譯
●神皇正統記國號解　さくらどの翁
●まるは、まりや　佐藤迷羊

八月十五日發行の裏錦第十號は體裁を改良して夏期大附錄を添ふ　定價一冊六錢市外郵稅一冊に付一錢

發行所　東京神田區駿河台北甲賀町十三番地　尚絅社

●唯一日刊 **大日本教育新聞**〔廣告料十行以下十錢、十一行以上九錢、三十一行以上八錢〕

●超然獨歩蕩漾せる世波の上に立ちて。國家教育の偉任を負ひ。達觀敏察自家の經路は自家之れを拓かんものは。我が大日本教育新聞の本領とす。本紙は其發行以來既に一歳有餘日。日尚ほ久しからずと雖とも。新進の機運月に其歩を駸めて。今や萬餘の紙數を發刊するに至れり。我が社奮進盡瘁の効。多少與力なきにあらざるも究竟愛讀諸彥の扶掖に因る大なりとす。是に於て本社は左項に擧くる特殊異常の割引法を設け。愛讀諸彥の眷顧に酬ゆるの傍ら。山陬僻地に至るまで教育思想の普及を期し併せて國家教育の指針たるへき大責任を就さんと欲す。乞ふ四方の君子益々提撕愛讀の榮を賜はんことを●一本紙は一ヶ月前金二十五錢（外に郵稅拾二錢五厘）の所公私立小學校。同教員及ひ學生諸君へは特別を以て郵稅を併て。金三十錢に割引發送可仕候●一本紙一ヶ月分以上の前金及ひ郵稅共一時に御送附の御方又は前次領收の前金相切れざる内後次の前金御送附下され候御方へは特に郵稅拾錢（端金貳錢五厘は本社負擔す）の制にて發送可仕候●一小爲替不便の地は郵劵代用に割增なく申受候得共書留郵便にあらざれば間々紛失の恐れ之れあり又前金領收後にあらざれば本紙發送不仕候

明治廿六年七月　日

東京神田區錦町三丁目八番地

大日本教育新聞社

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社發賣書籍目録

百人一首講義	鈴木弘恭大人述	正價二拾八錢 郵稅四錢
文法口授	同	正價拾二錢 郵稅二錢
小公子	若松賤子譯	正價二拾八錢 郵稅八錢
邦文學	松山高吉君著	正價二拾錢 無郵稅
雅俗諸體 作文口授	鈴木弘恭大人述	正價二拾五錢 郵稅四錢
徒然草講義	同 講述	正價八錢 郵稅二錢
參考標註 徒然草拔萃	同 標註	正價貳十錢 郵稅四錢
參考標註 竹取物語讀本	同 著述	正價貳拾錢 郵稅四錢
考標註正 土佐日記讀本	同 著述	正價二拾錢 郵稅四錢
女學校用敎本 國文抄讀	同 著	一册二十二錢宛 一册郵稅四錢宛
淺瀨の波	池袋清風大人著	正價三拾錢 郵稅四錢
公娼可滅	島田三郎 巖本善治 同著	正價四錢 郵稅二錢
廢娼演說	島田三郎 植木枝盛 同著	正價五錢 郵稅二錢
正義の反響	安枝武雄君編輯	正價拾五錢 郵稅二錢
日本女子讀本初步	吉田利行君著	正價二拾四錢 郵稅四錢
日本女子讀本	同 著	正價三拾六錢 郵稅六錢
明治 女小學躾草	松田敏足君著述	正價四拾錢 郵稅六錢
記事祝文 女子文例	香月恕經君著	正價二拾二錢 郵稅四錢
漢文抄讀	木村熊二君編	一册二拾四錢宛 一册郵稅四錢宛
婚姻論	橫山雅男君著	正價十六錢 郵稅四錢
產婦小兒 攝生法	船越鼎太郎君著	正價十錢 郵稅二錢
母のつとめ	三島通良君著	正價五十錢 郵稅六錢
西洋女禮	同 編輯	正價十二錢 無郵稅
子供のはなし	同 編輯	正價五錢 郵稅二錢
家政要旨	村木策君述	正價五錢 郵稅二錢
かへる	佐々木笑止郎君著	正價四錢 郵稅二錢
吾黨の女子教育	巖本善治君著	正價拾錢 無郵稅
元帳〆切之圖	海野力太郎譯述	正價五錢 郵稅二錢
家計簿記法	藤尾錄郎君著	正價二拾錢 郵稅四錢
家計簿記法例題	藤尾錄郎君著	正價拾錢 郵稅二錢
束髮案內	渡邊鼎君著	正價三錢 郵稅二錢
女學叢書 木村鐙子傳	巖本善治君著	正價八錢 郵稅二錢
貧兒の教育	安東松治郎君著	正價六錢 郵稅二錢
訓蒙双紙 猫と鼠	井上藤平君編	正價五錢 郵稅二錢
三板 廢物利用	故近藤賢三君編	正價三十五錢 郵稅四錢
昆蟲植物金石 採法集	星野愼之輔君著	正價八錢 郵稅二錢

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

書名	著者	價	郵稅
植物學	寺尾熊二君著	正價十錢	郵稅二錢
演說著作材料新誌	女學雜誌社編輯	正價三十二錢	郵稅四錢
看護婦美談	久野正香君著	正價貳拾五錢	郵稅四錢
希臘孝子腓立比物語	櫻井明石君重譯	正價三拾五錢	郵稅六錢
日本女禮式	坪谷善四郎君著	正價五十錢	郵稅十二錢
かな習字帖	小野鐙之助君編	正價拾錢	郵稅二錢
文かきぶり	同編	正價三拾六錢	郵稅六錢
應用植物編	星野愼之輔君	正價四拾錢	郵稅六錢
再版基督のすがた	植村正久君著	正價四拾五錢	郵稅四錢
信仰の標準	同		郵稅共七錢
耶蘇教衝突論	久津見息忠君著	正價拾六錢	郵稅二錢
教育學講義	巖本善治君著	正價八錢	郵稅二錢
藝者と手掛	炭谷小梅女史著	正價三錢	郵稅二錢
貞婦れ石	櫻井明石君著	正價壹錢	郵稅二價
ウヱスト女史遺訓	渡瀨かめ子通譯	正價十五錢	郵稅二錢
基督信徒のなぐさめ	內村鑑三君著	定價二十錢	郵稅二錢
婦人立志編	竹越竹千代女史編	定價二十錢	郵稅二錢
保羅之傳	松村介石君著	定價三十五錢	郵稅六錢
デビニチー	同	正價十五錢	郵稅二錢
新撰讃美歌	植村正久君編	正價八錢	郵稅二錢
新舊約全書	聖書會社出板	五十錢より	
新約全書	同出板	拾二錢より	

六角先生御方

若みどり香水効能書

定價
大瓶 金五拾錢
中瓶 金二拾五錢
小瓶 金拾五錢

○此若みどり香水はよく頭のふけをさり髮のつやを出し毛あしを速くして毛をすなほならしむ

○此わかみどり香水は髮の薄きところにつければ日かずをへずしてよき毛を生ず

○此若みどり香水はよく毛髮の根を養ひて毛を丈夫にするもすなほにするがゆへにをれ。きれ。ぬける。となく又しらがとなると少し

○此わかみどり香水はにほひよくして髮のねばりを去り常にもちゆればあらひがみの如くにして逆上をさげ頭つうの憂なしその若緑となづくるは髮の毛のつやよくなり黑髮のみどりをなしてうるはしきと年老て若き人と異なる事なければなりもし今の世に浦島あらば玉手箱をひらきて猶悔るとならん世に多き品と同ふする事なかれ

○御婦人方は髮をほどきたるときはつむりの地へ筆或は手の掌にて塗擦尙ほ日々筆にてぬるべし男子は朝梳る時に當りて之をふりまきて塗擦すへし

發賣元 橫濱市本町壹丁目十三番地 明治屋

橫濱大販賣 同 境町壹丁目十番地 西嶋屋宗三郎

橫濱大販賣 同 境町壹丁目廿五番地 近江屋榮太郎

東京大販賣 東京市銀座四丁目七番地 三河屋芳次郎

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

虫よけ香水 一名 防虫液

小瓶五銭 中瓶十銭 大瓶十五銭
白大瓶 金四十銭 黒大瓶 金五十銭

此虫除香水防虫液は諸の毒虫を撲滅させるは勿論兩便所其他の不潔場へまきちらす時は香氣馥郁として忽ちに悪臭を防ぐ衞生上寸時も欠くべからざる眞品なり○淺草公園料理店万梅○雷神門前喜千樓茅場町宮松亭木挽町万安赤坂の林屋其他

○貴孃紳士必需の香料

廣告

大瓶 六十五錢
小瓶 三十五錢

○人造麝香は佛國理學博士が化學的の作用を以て製造せし一大新發明品なり

○人造麝香は從來の麝香に比し數倍久敷を保つのみならず實に非凡の香氣を有す

○人造麝香は純白清淨の粉末なるを以て衣類等へ擦り込みおけば一種云ふべからざる幽香を放ち大に神身の清浩を覺えしむ但し色つき又は汚穢するの患ひなし

○人造麝香は歐米各國の貴婦人紳士社會に於て隆んにこれを賞用せり

○人造麝香は瓶入にして其上木筒に入れ携帯保存等に尤も安全なる裝飾となせり弊店發賣は上圖の如し

（僞物注意）

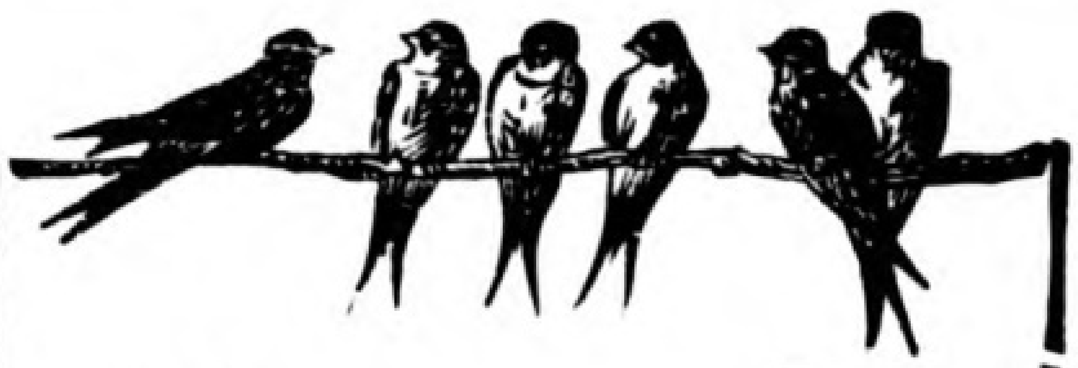
近頃弊店人造麝香の裝飾を摸擬し發賣する者あれども右は品質雲泥の相違あれば御求の節登録商標及星野の名義篤と御認を乞ふ

東京日本橋區伊勢町十七番地
日本特約賣發元 藥種問屋 星野與兵衞

○市內各藥店幷に全國有名なる藥店にて賣捌候●取次御望の方は御申込あれ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

評論 八號



要目

國民と思想(十頁長論文) 透谷

(右分章)思想上の三勢力○今の思想界に於ける創造的勢力○姉と妹○國民の一致的活動○國民の元氣○地平線的思想○高蹈的思想○何をか國民思想と云ふ○創造的勢力の淵源

教會論中篇(五頁長論文) 善治

(右分章)教會門內に入りたる人○會員增加して教會縮小す○教會縮小の因由○宗派心なきに因る○迫害なきに因る

櫻の花と日本詩人 棲月

にほはぬ花(小說) 花圃

第二の征韓論○伊藤博文氏東方策○井上毅氏學政經綸○柵と城南○硬派と軟派

郡司大尉と北溟に懷ふ、

何ぞ頌德表の納受に忙しき

教育上勳何等の名士一覽

次郎長逸事○カプテン、ゼンス○護教

程朱學の渡來 眠叟

分擔、責任、及、共勵 善治

人心をして倦まざらしむ

六冊 前金 三十五錢 府外 三十八錢

十三冊(半年) 同 七十三錢 同 七十八錢

廿六冊(一年) 同 一圓三十錢 同 一圓四十三錢

一冊 金六錢 郵稅 金五厘

東京麴町區下六番町六番地

女學雜誌社

明治廿六年七月十五日發兌

近藤嘉三先生著諸大家序文全一冊表紙石版美本菊版大形
圖書六十餘挿入賣價金十四錢郵稅四錢

言語作法 貴女の心得

本書略目次は淑女の心得夫人の心得化粧の要訣談話の心得訪問の心得賓客接遇の心得室內粧飾法和歌の書方香道の心得茶道の心得新式和洋挿花法家庭衛生法等其他數科にして一々圖書を以て之を平易に說明し其數科の內一科をも心得るも有益の書なり所謂貴女の位置眞價を進んとする婦女諸君本書を一讀せられなは本書は實に夫人の教師として淑女の朋友として而かも眞成に多識藝なる良師良友を得たると同し價値を有し眞の貴女たるを得ん

東京神田區美土代町三丁目四番地 頴才新誌社

梅毒 痔疾 痳疾 子宮 專門

右速ニ全治受合也若シ全治セサレバ藥價却ス●但シ診察無料

京橋銀座二丁目 東中通●畑中堂 山本醫院

百毒即治丸

山本醫院方劑◎無効返金一廻四十錢三廻一圓郵稅無料銀座二丁目十番地泰生藥舗販賣

明治廿六年四月廿五日內務省許可
明治廿六年七月廿一日印刷
明治廿六年七月廿二日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治

印刷者 仝牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社

印刷所 仝牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍工場 (電話十九番)